

主の家を思う心

ハガイ書1章

主の家はこのように荒れはてているのに、あなたがたは、みずから板で張った家に住んでいる時であろうか。(4)

このハガイ書から、聖書の舞台はバビロン捕囚後のエルサレムに移ります。ペルシヤ王クロスによつて解放された民はエルサレムへと戻つてきました。

しかし、祖国は荒れ果て、人心は乱れ、町の再建は困難を極めました。そのようなとき、主は預言者ハガイを通して民に語られました。「主の家はこのように荒れはてているのに、あなたがたは、みずから板で張った家に住んでいる時であろうか」。人々は自分たちの生活を豊かにすることに熱心で、主の家である神殿は荒廃したままになつていたので。「板で張った家」とは、木材の少ないイスラエルでは贅沢な家を意味します。自分たちは豊かな生活をしているのに、主の宮が廃墟となつているのを見ても平気でしたのです。そこで主は民に命じられます。「山に登り、木を持つてきて主の家を建てよ」(8)と。神を第一にするときにこそ、自分たちの生活にも豊かな祝福が与えられることが告げられます。この優先順位を逆転させてしまうところにわたしたちの罪があります。「まず神の国と神の義とを求めなさい。そうすれば、これらのものは、すべて添えて与えられるであろう」(マタイ六33)。

クリスマスの前にしたアドベントは、主がどれほど大きな恵みを与えてくださったかをおぼろげに巡らすときです。その大きな恵みに応えていくわたしたちでありたいと願います。